後鳥羽院御鈔

[illegible]逍遙軒禅尼道意

慶應義塾圖書館藏

後鳥羽院御鈔

俊成卿女
越部禪尼消息

やまと哥を詠せらるゝことひとへに
古今にいへるまても人のいさめ
ます色きつゝ手すみそれつるを尋ね
にもよらす只天性のこゝろさしそて
たのしみをとりて風情のくへなりたれ
めつらしきことも善悪にかゝはらず
わすれ意地すまよれるにうち
をさきまちくいとして一隅ともとも

まかくし詠はうるはしく有様
あれもとかくこある定詠はやはらく
ゑしかるあり詠は風情をも躰と
なるあり詠はすゝむとはこきをさら
いふまちわはちてつねの事は
をれりちまちをいはるさす要とこ
まゝ文も躰あるまゝかくしいま
初心の人はよみ脱してための

平安とおくろは古條あまたし
人つはあまて斟酌さるへき事也
一和哥学問して稽古難義
ゆるして本字なとわするましくは
よろしよの様よは人ある万葉
集はうくとよみならしと見えて
なくつしされとの事も用候て
ゆるせ様は万葉集めきとつく

さて詠する哥とえよ毎ねなる
うまいも家のまいそおろそま
文字の詞けらとまんすへあ
委もといきつくへきなる古今
集けりも左てはあしくよかれ
ぬへき哥もいくしてのせられ
るまじく候ふもへきなる
一道あはのしよなやきはめつへき

事にして蝋燭一寸よ詠し一時
よ百首詠なともする事練習也
あるよしきこゆる百首と詠
て詠むとおもはさるハめてたく述
三題ハ題と云く詠むとハ
いつれも始終よくさなら人いて
みせもして見えなときこゆれ卒
余の用にもつよいて究竟の事

かきの事へし大納言経信卿こそ
されもあまうれしくして為は
やくみな見侍る又俊頼朝臣
のもれありしもなきニ二様よ
よめるうるハしくやかしきも
にをはく見えりみくとハ
えよ見ゆれねすりうをかく
あつきめの一様もなけれ家への

唐衣きるすゝきかな
うつしかへ人とはさやの山にちよ
もけしきとは、のかれぬ地と
きみすくなからう

又
うちしくまの入江は風
おりつゝうつれ秋の中くさ
うつりきとそなる

故清門内府御句にて新撰集

時雅なとは秋の夕をやさく
心きかりしと申き　道て秘
そうしとも申つるきかさきを
もとひ類と人の句をかまへは
當年のわかうれ類と句せて
よし風情ものたらはあまた稀と
生学にてよくいきなりして
猶く歌にもよ見てさから

後頼の歌には、将何也もりなる
もろこしにはいはれ折なる将の
小やかしく見ゆる字も書くあ
りけることゝてもあるきさとは也
是は唐書もあれもとこうなるもり
小初もしらくてしつもさもは
書くあるかくさそてきかくれ
方を記すあひにて年詩

の文人とおほる将書人
まにひなともきすよあるなし
古今説のど手なる清輔けやる
ことあけまとも侍そ恵れめさ
ますなり八雲
かしへいうもれてりもむくし
いくせよなりね八月の文字を
きみてつなる

後鳥羽院はしきやうよりみさ
ぬ人はあやめ草は水といふ事なら
やうな事ハよし無とやら
名所山ハ春まつまなれはまよ
あさくても鹿のそらくなるを
持信のつれ事中ともさきらね
世よなりてハ大炊御門前二重流
両中御門の持殿 吉水前大僧正

まく 非勝なる 奇説ハいとふ
りえくとあるやうよ毎まきれ
持殿ハなけれも非とて諸家
尓称をてときいうそや毎詞
のなき事ちゝふよしあれはふ
すきなりさ 百首なとのおまよ
地事りなくみしさてかへりてハ
非とをいひ川へなとしつ 秀哥

おほけなくてあさそめてとハ
かさのせうし大僧正ハおほけなやう
西行ハ常にかはくれから一首
いはまの上手にてゆるさす称と
めてしハ称とハのまゝ称き
古よもちのかはにおほく
人のくちよわる一首あはれ
やよける末の紫よ袖とくや

称ハくハ忘れしやさるはあはれハ
なかはれともよのはハ称はうらく
よみても中に寂蓮かくもハあり
あふ家のことよ深くすて雲よ
おほそよ秋ゆく人の袖杉と
けるの庭の世萩かゝり身と
忘れうらハ代わすれ水にあはれ
かはれ寂蓮定家家隆雅経

秀能にかはる寂蓮ハなほさりなら
す哥よみし物なりあまり案
しくたきしほとにたけなと
そいたくハたかくハなかりしかとも
いさたけある哥よまむとてたつたの
おくにかゝる白雲と三体の
哥によみたりしおそろしかりき
折につけてきと哥よみ連

哥しないし狂哥まてもにはか
事にゆへあるやうによみしかた
真実の堪能と見えき讃岐ハ
かつしハきこえけり
まへのきらかなとおほき誉
もそてきゝわきまへかたき
なるゆふくしく秀哥とも
よみしありけるおほさそれも

もと歯ならびをけもあきまて
めつらしく見ゆ
雅経はふるき葉かへりて歌よみ
物からくさけあらう歌をは
むねとおほくはよまれしかとも
手かゝりてとこさ家隆卿此
詞からをうけあつて海まてすき
哥もおとのれはそてはしもる

やうはあやしき海ふかきみすち
うら歌にも手はそもれしのひ
あるものもあやきしつそに近年
定家卿の歌のうしなとよし
きか女房歌かみえは母やや
けしき歌にはもよめるき　意の
そりはかねよみ松木の葉をて
うかひく母はあまりつはりておの

あとのかゝすれ今秋のあはれはまゐ
かゝるも折々くやけしき哥とも折き
人の春ちらも夏はよふく
まくほしさ折ふしかく
まへしきらし折々くさちて
ゆへは花のちはかさあらる
よしそていくやけしき宮氣い
けふさきぬあけしよは勝寄

文のかとふらもあさくとなりぬ
うへは御中て後への哥かなもれよ
牢すやけしくりみくとあらやうは
ミゆるすゝ両ゝよふあやかく今
道は蓮しふけはかは勝寄
き哥見てかくる流きほし
流れしきなし引返の少は
あつまわまいちつえりて馬と性っ

むかし侍る若き人ありけりをとこさ
ありさき他人の詞ときくにやなす
出て極まり哥なとのやうなき
いはくこと事なとにあまりて
ほかの事なれはなりにけるを
もさよなりて披露あれとも讃
家あはれにして又は賤家の
家のあはれ先年にはちうる

花のさかりに花の春のにすみ華
ゆかしいてあそしのいてかれ
おのまよて男花哥にまう
ゆつりしま定家たをも柳にて
詠して侍く
ごし地へてかきとよめて花の跡
あやめるとのあはれなやすま
たを治物として女手にあはせ

述懐のうたやさしくきこえ人
おもしろきも希代の勝事にてあるを
きこえもし讃もへきことなき
先達とも申すことに書道には
よろしき事にやさしく面白も
あるやうなる心とはなりてすら
讃ことす宗家のことよくえ
日本内よりもされまこのちとは意

頼ともわたくし中将の桜女殿へ
たゝしらまたてまね人の
しるやのくるしけせぬことせられ
そらしいあまちきことみしさい
をかしきも新古今集中まて
おのえひれ撰集のゆくさは
こわ詮なきさいくり讃一字
ゆゑあるとさて絶き若よわくして

おもひあつくされ候ハヽよく〳〵みし
られても悪報のおそろしき井して
よみうら忍め候なとゝ物語
う候ゆへ人のまへハおくる事
をしかれの照らさるゝわけやハ
あるまとも大との樫は一体け
ふれよしといく候は評定は
さなて中きき家陣おもきし

事とは事ゆゑはあんまり
究勝天王経は必不の修学は候は
生田の森はいまく一所にて
あさましくれあまりへ物を
の過去かへりての残の故実
などいはんとは清濁とわさまへ
わかいは恨なりとも成と物語け
終りさまをもつくかなゝすゝん

一人のよからぬ事はなけれとも
傍輩なとゝ讒言すれまやは
わか地てむつまのとき勝
れ地ありも人のまれなるき
ものよわすにやうなると
磨まを以て紅をかくのみよ
やらききと本柳とあるわさ
うれ昔すれさしん初へれの

ま孫の無柳なき事あるのゝ
宗家は出等の上手とそ心
なにとなけれとも うはくる
いはまくまわゝ弓勝れ地
まてわさ
秋とは吹あへぬ風ゆゑつる
いくへの毒れ花の下なま
南ゝま秋をかけとうらつめくら

すさまじきあへぬ風は冬のつゝと
へ盛ことはいさき露の下かよと
なけれの為にあいなく袖て
いうなる事れ本哉となあかめ
障子のいくれりきのことは陶と
まきらて名あんしまとも
かくめさくれ失錯は他いまもと
あるべき事しはまりそてなさき

ことなる人のまゝけらしもよく
みえつしあとはのやりくえん
かまほはつへともいふもいさくハ
みえたるりきのまさまへしかまき
それなのあれかれいふ多もれと
うかもなけまともいひすとら
いとふはゝきの事しきられて
あまりさ御もちわ袖かとれ

かやうの事とハ申すとも心得ね
あしき好心の者事とて人々申は
あつ事おほくまつりしかとのたまふ
あれて心ず不定なり 輕なる 而
りなまん 京上の者事ハきことも
いうやさしき人心ざし申ね
あくいはまでも あらかよ人る者
まあれ事 陽氣 心への手れ

顕宗なれとも よきさまよく聞えき
まいハおほくあるあらき てもちよ婦人
のわつ心よからぬ事とりて たるく
事の人の所年とてもかくまも
偏執の義とも へ心よハあるね
かる事なれハ 事つ事ね
事し 撰集にも 入て 好代こそ
まれまハ 事にて あすあまたる

そもそも又序手をかくてその
うち又はわすれん
秘蔵々々、此之書相承説云

写本云
仁治元年十二月日於大原山
西林院普賢堂以数本令交
了、浄宗房専本書写之

此法門者如形所他而無子細
雖未見読頗有此本也
殊殺地てゆへに見々、
重信房 勝林院 在判
弘安十年七月日以右書写之校
年此本之ところ随分在
の示事

於此法輪抽者椎野寺内谷

浄金剛院長老
光道上人今生存

一不物之伝閑度

来て観印之召叢設許一見

年應寺中三傳之法本中

之画雅見之宗録之山之深

珠佛其如源魏都應好之

云夜那見人列

安積香山隠埜 蘇劉

歯つゞきの続く言葉の流れ心ゆかし
あまたらく十餘りて事
ぬくう続しうよろしからば見えて
いうはゞ事とたはくはうぞうさ
きめしのいゝもら三ゝといまで
見てめる哥よとりてはあへ物
此方よめてゝくゝ言葉と見え
侍ておゝ乃撰集此おこる葉

あまの海よりそれとはる
て詞とゝ縁ゝはるまゝ字
やうてめよたよしくてありてハ
東一とうらおほくうの色へ
三代集ハおとてのく世もおや
世々のくてつて詞の
なよふまさる海名は
はりなきわうけら好揺ハ

よみ哥あまたありきてんなる
也されとふるひたるさまにてやう
すなしくは金葉集詞花集さやう
のやうなるも千載集わたりかは
御ちよは物様にはそてあく
序なともかくしもなくやさしく
たやうは歌は哥もいさうそ
のいみしんともなかりけり

新古今又春の花秋の紅葉
なといろふかきを風流也
乃秋の月果菊の雪れや
うつくしく佗してなれてつ
すれ詞なといまそめてしく
まことにもしろく京極殿の
かんな序なと何をとひかく
く称よりも見えられつるさまなれ

やうして新勅撰ハかくまて事なす
中納言入道殿すゑ人の心にて
ハくならそゝくなるまゝけふくなるし
地よそひさけるめてそうく侍る
ならハれ一人ていつもおかしくゆるさす
られ事なき院けるに清撰とて
ハ事めもくれたる哥ちそし
えしの哥よくハ殿そ清ちはふ世

おかまもなるハいさゝかのこともはなれし
やまとて入道このころハいさゝせ
給ひき千首とやきさらし
かるゝくいやとうらおもゝくき
出れハ異なる人後徳殿の御こ
まて定家の子にてありけらせ
給なる哥のうてにさ次第かし
御へよりてはつねかやうそれ

せむかたなさのはてうれし
御まへにまゐりて御らんせしとき
ときつわたらの為にもなく也
めしかへすあまたくるしく
さもねかひつく たてまつりて
右ても御まへにとさしいつくき
女房は御そはちかくちかきね
のすそのをまてゆるしけれ
かみのかほをみれはきよらにて
きしうゐのこしひたるまて
あなうつくしやとおほしめすと
南殿のけふきよらなるて見る
てみれはひとつて寄も皆く
もろきかくなしいうちかや
かなもかゝみれくおもく
本より詞の花はいろはなひ

文ハもとしつたはりておほけまをと
哥代々の井ハ哥よりておほし
道すとやくとかう事あつまりし
撰しさせ給ひて勅撰い
のちにきそ見わかぬてうしく
天暦四年とや後撰のなはて
序のねもよくいつかなと
序はあらかくさけいさき事なん

そてきくう撰よ又哥読読の
これまこと女房読の字すゝく
わかしせおてしまひ読の説の読し
ゐるとわかくひとうけたまはる
ちやわものあはみつれおかへて
やうふききようくうけくかくし
宗貞しくあさきて信もおりて覚く
哥の事ことく事おほく

いにしへのまさしきもそてくく
世のはじめまされ人でもこの君や
のきハ代梅のかざしてまゐらせん
為にはきみにくいまさして
うきく天かをおりてもやらね
かゞやうはうる事いくうもくや
いくうもおもしく天地宮
のそなはり宮しく神くて
かりにく事かくこつかさらし
てくまでをかまあえ神もまして
とくく寄せはをかなし
まゐらのちてかくる宮まゐ
是まてらしわろかたくかみ
伴の宮也人代ちへつきひとつの
わしくひ
寛永いろの寺さ第よいつか宮寺

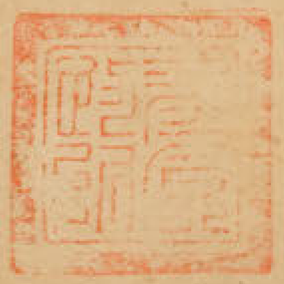
にしの山の入れおいおいれやゆく
秋風よそれし雨はやまわで
きえてなを峰のはしよ山へそ
あをしくはいまはあはれなる
うらみなくなりわのさきの代
とおもひしもあまる
光きよくあふきし月ての夜は
くもりなきかけの初さ

みもしゝよやからしたわ
おほく

本云
元平は中院殿書写之
つゝ文は花本書之

後鳥羽院御抄續後撰之時越部
禪尼　俊成卿女　消息先年手並之處
爲權家被借失之間誂或仁令
書寫訖
觀應二年九月九日

右　後鳥羽院御抄之一冊者冷泉殿
爲秀卿以正本令明也　而今以與書者
西方行者頻御懇望之條判形
無紛者也　誠可謂錦上花歟所
寛永四暦拾月二日
右筆下了



132X
26
1